

「父と子と聖霊の交わり」

主任司祭代行 松本 巖

「園長先生、おしえて」

「なんだい、けいちゃん」

「人はどうして生きているんですか」

「…」

私が園庭を歩いていたら、4歳の年中さんの男の子が、向こうから走ってきて、私に問いかけた。時々子どもたちは、難しい質問をしてくる。特にカトリックの雰囲気を受けている子どもたちの問いは宗教的でもある。

この夏、モンテッソーリ全国大会(学会)が東京・駒澤女子短期大学で開かれ、運営側の私は、研究発表の一コマを担当することになった。発表の原案を組み立てるために、「カトリックの人間観に基づく幼児教育」について思い巡らす日々が続いた。「人間とはなにか」→「人間とは神の似姿、神の像」。では「神とは何か」→「神とは、父と子と聖霊、愛の交わり」。「神の似姿である人間は神のように交わりを生きるように招かれ、交わりを生きられたときに幸いを体感する」。だとしたら、「カトリック教育とは、交わりを生きることが出来る人間を育てること」となる。そんな骨子の発表となった。

先日、上智大学の恩師である長島先生の葬儀ミサに参列した。ミサの終わりに、病床からご本人が口述筆記させた遺言を奥さんが朗読された。「ハネムーンの朝に感じたあの充足感を今も思い起こせます」と先生は奥さんに語りかけていた。なんともスイートな遺言状だった。出会い、交わりを築きあげ、一つの愛の完成としての永遠の命への解放。先生は、確かにもう神の世界におられるような感じがした。

あたたかな心地よい交わりを築くためには、「自立」していることが不可欠な気がする。4月の幼稚園の玄関先で「ママ、行かないで！ママ、行かないで！」と泣き叫んで、全存在をママに委ね、ママに依存していた子どもも、二、三ヶ月たつうちに、泣かずに一人でお着替えできるようになっていく。「自立」が始まったのだ。そうなってくると、友だちと楽しく関り、交わりを築くことが出来るようになってくる。

共依存的ではなく、自立したもの同士の間で成立する交わりこそが互いを成長させ、周りに対しても奉仕するという派遣的な開きをもつようになる。

「そのような交わりを生き、交わりを築くために人は生きているんだよ、けいちゃん」